

広島都市学園大学の地域子育て支援拠点事業に関する一考察

－「いーぐる」利用者への第7回質問紙調査から－

富田 道子・田丸 尚美・深澤 悦子・國清 あやか
須崎 朝子・瀧口 美絵・加藤 弘美・本岡 美保子

広島都市学園大学 子ども教育学部

要 旨

オープンスペースを利用している保護者を対象に、第7回質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。

第一に、主な利用保護者の年代は30代で、利用保護者のほとんどが核家族世帯である。「何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族」の有無にかかわらず、多くの利用保護者が何らかの悩みをもっていることがわかった。

第二に、オープンスペースを知ったきっかけは、「友人・知人からの紹介」や「インターネット」の回答割合が高いが、「子育て情報誌」の回答割合は、第6回調査結果の5.8倍になったことが明らかとなった。

第三に、オープンスペースの利用理由として多く挙げられた項目は、「子どもが喜ぶから」の回答割合がもっとも高いが、次に挙げたのは「設備や遊具が充実している」、「親子でいろいろなおもちゃで遊べる」であった。

第四に、子どもについての気がかり・心配ごとの第1位は「食事」であり、次に「発達面」であった。この割合は、昨年の第6回調査より10ポイント上昇した。さらに、「からだの成長」や「トイレトレーニング」の割合も7ポイント上昇するなど、これらの項目については、昨年よりも気がかりや心配ごとを多く抱える保護者が増えていることが明らかとなった。

第五に、利用者自身については、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまふ」の回答割合がもっとも高く、次いで「子どもにイラっとすることがある」が高いことがわかった。

キーワード：地域子育て支援拠点事業，大学，オープンスペース，保護者，乳幼児

1 はじめに

現代の子育てにおいて、大豆生田（2006）が常に母と子が一緒という状況やサポートのなさが子育てを苦しくさせていることを問題視しているように、少子化や地域における人間関係の希薄化などによる親子の孤立が大きな課題となっている。また、子ども虐待の報道も後を絶たない。昨年11月29日のNHKニュース¹⁾は、虐待防止ポスター『あなたのTELで救われる親子がいます』を取り上げ、虐待加害者である親に対しても地域のさまざまな支援が不可欠であることを示した。子育て支援事業の一つである地域子育て支援拠点事業には、子ども同士、親同士、さらには地域の様々な人たちと子育て家庭をつなぐ「架

け橋」としての働きが期待される。

まもなく開設6周年を迎える広島都市学園大学内「公募型常設オープンスペース」（以下、オープンスペースと称す）においても、これまで親子の交流の場の提供や交流の促進、子育てに関する相談・援助や地域の子育て関連情報の提供、加えて、子育てやその支援に関する講習会等を行ってきた。地域全体で子育てを支える拠点としての機能を担うため、さらに利用者の多様なニーズに合わせた、より質の高い事業をすすめる手掛かりとして、オープンスペースにおける利用者への質問紙調査結果を考察する。

2 研究方法

2.1 質問紙調査対象者・時期・調査方法・倫理的配慮

質問紙調査の対象者は、オープンスペースを利用している保護者であり、調査時期は2019年9月24日～10月17日（101名、回収率100%）であった。

調査方法は、オープンスペースを利用する保護者に調査依頼状と質問紙を手渡し、調査の目的とともに、①調査依頼状の内容に目を通した上で、フェイスシートの「調査に同意する・しない」のいずれかに印す、②「調査に同意する」者は各調査項目に回答後、また、「調査に同意しない」者は未記入のまま、質問紙を所定の場所に設置した箱に提出する、という手順を説明した。なお、質問紙を回収の際、子育てアドバイザーや他の利用者に回答内容がわからない場所に箱を設置した。

なお、本調査は広島都市学園大学倫理審査委員会の承認を得ている。

2.2 分析方法

質問紙調査における回答は、基礎統計量と回答の割合で集計し、全体的な傾向を把握した。

3 結果と考察

3.1 属性・家庭環境

オープンスペース利用者に関する属性と家庭環境は次の通りである。

まず「これまでの利用回数」について、「初めて利用した」が14名（13.8%）、「2～4回」が20名（19.8%）、「5回以上」が66名（66.3%）であることが明らかとなり、利用保護者の6割強がオープンスペースをよく利用していることがわかった。さらに、昨年度の「初めて利用した」親子の割合が8.7%であったことから、今年度は新規利用者が約1.6倍増加していることも明らかとなった。

利用保護者の年齢は30代がもっとも多い。また、利用する子どもの詳細をみると、第1子のみ利用は72.3%であり、昨年よりも12ポイント増えている。新規利用者の増加が影響していると思われる。次いで第1子と第2子利用の12.9%であった（表1）。

表1 利用者（子ども）の出生順位

利用者	人数（％）	
第1子のみ	73	72.3
第1子と第2子	13	12.9
第2子のみ	11	10.8
第2子と第3子	1	1.0
第3子のみ	3	3.0
計	101名（100％）	

家庭環境は、利用者のほとんどが核家族であり、何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族の有無とクロス集計したところ、パートナーと同居している場合は64.5％、パートナー及び父母と同居の家庭で100％、パートナー及び義父母との同居の家庭で100％、ひとり親家庭で100％が「頼れる親族がいる」と回答した。換言すれば、パートナーと同居している核家族の35.5％に「頼れる親族がいない」ことが明らかとなった（表2）。

表2 家族構成と頼れる人との関連

家族構成		頼れる親族	
		頼れる人あり 人数（％）	頼れる人なし 人数（％）
第7回	パートナーと同居	60（64.5）	33（35.5）
	パートナー及び 父母と同居	2（100）	0（0.0）
	パートナー及び 義父母と同居	3（100）	0（0.0）
	ひとり親家庭	2（100）	0（0.0）

3.2 オープンスペースを知ったきっかけ

オープンスペース「いーぐる」を知ったきっかけを尋ねた結果は、表3の通りである。これまでの調査結果と同様に「友人・知人からの紹介」の割合がもっとも高く、次いで「インターネット」、「区役所や公民館」となった。

表3 オープンスペースを知ったきっかけ（複数回答）

項 目	人数（％）
友人・知人からの紹介	45（44.6）
大学のチラシや看板を見て	12（11.1）
インターネット	24（22.2）
子育て情報誌	12（11.1）
区役所や公民館	19（17.6）
市の広報紙	2（1.9）
その他	3（2.8）
その他／近所の方	
助産師の方	
RCC イマなま（テレビ番組）	

3.3 オープンスペースの利用理由

オープンスペースの利用理由は、「最も当てはまる」、「当てはまる」、「当てはまらない」の3件法で回答するものとした。この平均値は表4の通りである。

表4 オープンスペース利用理由

項 目	第7回調査			
	当てはまらない (%)	当てはまる (%)	最も当てはまる (%)	3件法平均値
自分の友人を作ったり、友人と交流	26.7	53.5	19.8	1.93
悩みを気軽に話せる場がほしかった	9.9	61.4	28.7	2.19
相談に対してアドバイスがもらえる	11.9	61.4	26.7	2.15
いーぐる通信・SNSから情報が得られる	45.5	47.5	6.9	1.61
子どもが喜ぶから	2.0	15.8	82.2	2.80
同じような年齢の子どもとの交流	5.0	33.7	61.4	2.56
子どもを集団になれさせるため	5.0	24.8	70.3	2.65
育児休暇後の復職に向けて、子どもの保育所入所の準備として	61.4	23.8	14.9	1.53
幼稚園就園の準備として	48.5	39.6	11.9	1.63
幼稚園選びのための情報を得る	55.4	34.7	9.9	1.54
ストレス解消やリフレッシュ	2.0	42.6	55.4	2.53
設備や遊具が充実している	0.0	22.8	77.2	2.77
親子で絵本を楽しめる	5.9	52.5	41.6	2.36
親子でいろいろなおもちゃで遊べる	0.0	27.7	72.3	2.72
親子で砂遊びができる	21.8	40.6	37.6	2.16
季節感のある室内装飾を楽しめる	24.8	54.5	20.8	1.96
身体計測ができる	22.8	47.5	29.7	2.07
子育て相談がある	6.9	51.5	41.6	2.35
講座や講習会がある	27.7	42.6	29.7	2.02
あたたかく迎えられ、ほっと心がなごむ	3.0	37.6	59.4	2.56
安心して自分がトイレに行ったり、下の子の授乳ができる	11.9	43.6	44.6	2.33
安心できる環境だから	5.0	27.7	87.3	2.62

多く挙げられた項目に着目すると、「子どもが喜ぶから (2.80)」、「設備や遊具が充実しているから (2.77)」、「親子でいろいろなおもちゃで遊べるから (2.72)」、「子どもを集団になれさせるため (2.65)」、「安心できる環境だから (2.62)」、「同じような年齢の子どもとの交流ができるから (2.56)」、「あたたかく迎えられ、ほっと心がなごむから (2.56)」の項目の平均値が高いことがわかった。

3.4 子どもについての気がかり・心配ごと

子どもについての気がかり・心配ごとを尋ねた結果は、図1の通りである。

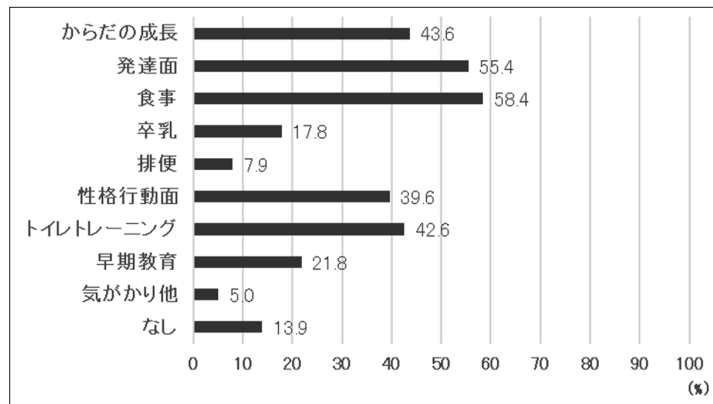


図1 気がかり・心配ごと（複数回答）

気がかり・心配ごとに「食事」を挙げた者は58.4%と最も高く、次いで「発達面」が55.4%、「からだの成長」が43.6%、「トイレトレーニング」が42.6%であった。

さらに、気がかり・心配ごととして「食事」を挙げた利用者にその詳細を尋ねたところ、「好き嫌いがある（54.2%）」、「かまない（25.4%）」、「食べる量が少ない（23.7%）」「料理を作るのが苦手（20.3%）」という回答が得られた。

3.5 食事に関する気がかり・心配ごと－「その他」の自由記述

子どもの食事についての気がかり・心配ごとの「その他」に記述された内容には、「食べすぎる」や「食べる度に怒ってかんしゃくを起こす」など『食べ方』に関するもの、「離乳食を始める時期」や「どれくらいの量をあげてよいのか」など『進め方』に関するもの、「離乳食の味付け」や「離乳食のレパートリーを増やしたい」など『調理技術』に関するものがあつた（表5）。

3.6 「子どもについての気がかり・心配ごと」と「すぐに頼れる（近居している親族）」の有無との関係

3.1において、利用保護者と子どもが、パートナーと父母またはパートナーと義父母との同居家庭、あるいはひとり親家庭の場合、いざというときに頼れる親族がいることがわかったが、パートナーと同居している家庭においては35.5%の家庭に頼れる親族がないことがわかった。この結果を受けて、頼れる親族がいる家庭では「子どもについての気がかり・心配ごと」が少ないのではないかという仮説のもと、クロス集計を試みた。その結果は表6の通りである。全体的には「頼れる親族」の有無に関わらず、気がかり・心配ごとがあることが明らかとなった。

表5 食に関する気がかり・心配ごと「その他」自由記述

分 類	記 述 例
食 べ 方	食べすぎる。ストップをかけないとずっと食べている（2）
	早食い
	食べつかみが苦手なのが気がかり
	食べる度に怒ってかんしゃくを起こすこと。 味付けが気に入らないのか、量が足りないのか分からない。
	なかなか食べてくれない。集中力がない。
進 め 方	離乳食を始める時期
	どれくらいの量をあげてよいのか（2）
	大人と同じものを食べる時期
調理技術	これから始まる離乳食が不安（作るのも、子どもが食べるかどうかも）
	離乳食のレパートリーを増やしたい。
	（離乳食の）栄養はしっかり取れているか。
	味付け（2）

表6 「子どもについての気がかり・心配ごと」と「すぐに頼れる（近居している）親族」の有無との関係

複数回答可

	からだ の成長	発達面	食事	卒乳	排便	性格 行動面	トイレ トレー ニング	早期教育	その他	なし	
頼れる 親族あり 数（%）	30 (44.1%)	38 (55.9%)	43 (63.2%)	14 (20.6%)	6 (8.8%)	25 (36.8%)	28 (41.2%)	16 (23.5%)	3 (4.4%)	11 (16.2%)	(68名)
頼れる 親族なし 数（%）	14 (42.4%)	18 (59.5%)	16 (48.5%)	4 (12.1%)	2 (6.1%)	15 (45.5%)	15 (45.5%)	6 (18.2%)	2 (6.1%)	3 (9.1%)	(33名)

3.7 オープンスペース満足度

オープンスペースについて満足しているかどうかを尋ねたところ、「満足」が97名（96.0%）、「ふつう」が4名（4.0%）となり、ほとんどの利用者が満足と回答したことがわかった。

3.8 利用保護者自身について

利用保護者自身の、子どもとの向き合い方について尋ねた結果は表7の通りである。ただし、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」の項目は、第1子のみ
の家庭には答えられないため、その場合は「ない」にチェックするよう指示した。本項目
については、該当する27名の回答割合を示した。

この「よくある」「時々ある」の回答割合に注目すると、「子どもに『ダメ』と制止する
言葉が多くなってしまう」の64.3%がもっとも高く、次いで、「子どもにイラッとするこ
とがある」が42.6%、「子どもを連れて外出したいと思うが、疲れてしまうためできない」
が27.7%、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」が18.8%、「子ども

表 7 利用保護者自身について

	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
ダメと制止する言葉が多くなる	29 (28.7)	36 (35.6)	32 (31.7)	4 (4.0)
外出したいが疲れてしまい出られない	6 (5.9)	22 (21.8)	33 (32.7)	40 (39.6)
上の子我慢させてしまう (第一子のみ家庭除く)	12 (11.9)	7 (6.9)	8 (7.9)	0 (0.0)
子どもにイラッとすることがある	17 (16.8)	26 (25.8)	42 (41.6)	16 (15.8)
手をあげて、後悔してしまうことがある	2 (2.0)	4 (4.0)	16 (15.8)	79 (78.2)

に手をあげて後悔することがある」が6.0%であった。

3.9 自由記述から

質問紙最後の自由記述には、多くの感想が寄せられた。

具体的には、「先生たちが子どもたちのことをよく見てくださって、時に一緒に遊んでくださるので楽しく過ごせます。いーぐるの雰囲気大好きです!」「手作りおもちゃや木のおもちゃ等種類も多く、自宅では遊べないものに触れさせてあげられるのでいい。ここに来られる親御さんとも話しやすくて、自分の子どもだけではなく皆で子育てしている感じがありがたく嬉しい」「上の子の時から利用させていただき、私自身が一番救われています」「アットホームで温かい雰囲気、子どもの名前も覚えてもらい、様子や変化についても話してくださり嬉しいです。子育てでのちょっとした悩みも気軽に話せるところが助かります」などがあった。

3.10 考察

今年度の調査結果から、新規利用者が増えていることがわかった。その背景として注目した質問項目は、本オープンスペースを知るきっかけである。この回答割合の高かったものは「友人・知人からの紹介」や「インターネット」であり、これは昨年との調査と同じ傾向にあるが、今年度は「子育て情報誌」と回答した者が昨年の5.8倍に上った。子育て情報誌関係者の取材・撮影において本オープンスペース利用者の協力を得ていることから、新規利用者増加の背景には、利用者の本オープンスペース満足度の高さと口コミがあることが推察される。

属性や家庭環境について、まず利用保護者の年代をみると、その多くが30代であることがわかった。次に、利用子どもの出生順位に注目すると、「第1子のみ」という家庭が72.3%と、昨年（第6回調査）の結果を約12ポイント上回った。新規利用者が増えたことと関連していると思われる。さらに、利用保護者のほとんどがパートナーと同居しており、核家族世帯の割合が非常に高いという傾向はこれまでの調査と変わらないが、パートナーと同居している利用保護者の「何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族がいない」の回答割合は、第5回調査の25.0%、第6回調査の32.7%、本調査の35.5%と年々

上昇している。婚姻による居住地の移動、家族の転勤によるものが考えられる。

オープンスペース利用の主な理由の上位項目には、過去の調査とほぼ同じものが挙げられた。しかし、回答割合の順位に着目すると、第1位「子どもが喜ぶから（平均値2.80）」に次いで割合が高かったのは、第6回調査の場合「ストレス解消やリフレッシュ（同2.70）」であったのに対し、本調査においては「設備や遊具が充実している（同2.77）」、「親子でいろいろなおもちゃで遊べる（同2.72）」となった。自由記述内容を先取りすると、「手作りおもちゃや木のおもちゃ等種類も多く、自宅では遊べないものに触れさせてあげられる」、「砂場遊びは安心して遊べる砂場が少ないので、とても魅力的」、「家でどのようなおもちゃを用意すると楽しく遊べるか、どんなことに興味があるか等を知る良いきっかけになっています」など、遊びに関心を寄せる記述がなされていた。汐見（2017）が述べる「子どもは、生まれ出た世界がどんな世界かを知ることによって好奇心で、見える世界、聞こえる世界、感じる世界に対して、懸命に探索をするようになる。（中略）五感を使って懸命に見えるもの、聞こえるもの、触れるもの、匂うもの等に関心を向けるだけでなく、自ら持ち上げたり、触ったり、投げたり、振ってみたり（中略）いわば実験をしながら環境世界の構造や論理を認識していく」と同じ視点で元園長の保育アドバイザーらが本オープンスペースのおもちゃを手作りし、既製品を選定して、それぞれのおもちゃの良さ・遊ぶ意味を利用者保護者に伝えていることの効果を改めて確認することができた。

子どもについての気がかり・心配ごとについて見てみると、第1位は「食事（58.4%）」であり、それに続く「発達面（55.4%）」の割合は、昨年の第6回調査より10ポイント上昇した。さらに、「からだの成長（43.6%）」や「トイレトレーニング（42.6%）」の割合も7ポイント上昇した。「性格・行動面（39.6%）」も含め、利用保護者の4割以上がこれらの気がかりを持っていることが明らかとなっており、食に関わる相談や子育てに関わる相談、保育アドバイザーの日常的な支援が昨年以上に必要であることを確認した。

次に、気がかり・心配ごととして「食事」を挙げた利用保護者にその詳細を尋ねたところ、もっとも多かったのは「好き嫌いがある（54.2%）」であり、次いで「噛まない（25.4%）」、「食べる量が少ない（23.7%）」、「料理が苦手（20.3%）」であった。「その他（33.9%）」の記述内容としては、「食べすぎる」、「離乳食の適量」、「味付け」などが挙げられた。『食のなんでも相談』で利用保護者から聞く悩みも、今回の調査結果と同様である。なかには「発達曲線通りに育っていないことを病院で指摘され、もっと食べさせるよう指導されたがどれだけ食べさせればいいのか」や、「自然に卒乳ができ、離乳食後期の食事等で子どもはお腹が満たされているが、病院で（月齢という基準をもとに）もっと母乳を飲ませなさいと指導された」などもあり、子どもの成長・発達や嗜好の個人差についてより丁寧な説明が必要になる。引き続き相談日に声をかけやすい雰囲気をつくりながら利用者支援をしていきたい。

さらに、「子どもについての気がかり・心配ごと」と「すぐに頼れる（近居している）親族」の有無をクロス集計してみたところ、「すぐに頼れる（近居している）親族」の有無

にかかわらず、多くの利用保護者が何らかの悩みをもっていることがわかった。利用保護者の自由記述には「アドバイスを頂けて」、「私自身のストレス解消」、「子育てでのちょっとした悩みも気軽に話せる」、「私も癒されるのでよく来ています」など、利用保護者自身の子育てに対する思いが記述されており、上田（2018）の「子育てに自信がなく不安や緊張が強い人が拠点に通い続けられた経験は、自分のことを覚え気遣ってくれる人や、子育ての大変さや悩みに共感し、共に寄り添ってくれる人の存在によって支えられていた」のように、本オープンスペースがその役目を果たしていることを改めて認識した。

利用保護者自身について尋ねたところ、子どもに対し「よくある」「時々ある」と回答割合を第6回調査と比較すると、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしま（64.3%）」や「子どもを連れて外出したいと思うが、疲れてしまうためにできない（27.7%）」、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある（6.0%）」はほぼ変わらないが、「子どもにイラっとすることがある（42.6%）」は12ポイント減少していることがわかった。本オープンスペースにおける『なんでも相談』が、利用保護者の育児ストレスや育児不安を軽減する役目を担っていると推察する。ただし、先述した「子どもについての気がかり・心配ごと」の割合の高まりや、「すぐに頼れる（近居している）親族」の有無にかかわらず、多くの利用保護者が何らかの悩みをもっていることを踏まえると、利用保護者の認識する育児不安とその要因、利用保護者のパートナーとの関係、どのような生活を送っているのか、子どもへの関心（苦手感の有無）など様々なことが考えられるため、質問項目の検討を視野に入れたい。

4 まとめと今後の課題

オープンスペースを利用している保護者を対象に第7回質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。

第一に、主な利用保護者の年代は30代で、利用保護者のほとんどが核家族世帯である。

「何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族」の有無にかかわらず、多くの利用保護者が何らかの悩みをもっていることがわかった。

第二に、オープンスペースを知ったきっかけは、「友人・知人からの紹介」や「インターネット」の回答割合が高いが、「子育て情報誌」の回答割合は、第6回調査結果の5.8倍になったことが明らかとなった。

第三に、オープンスペースの利用理由として多く挙げられた項目は、「子どもが喜ぶから」の回答割合がもっとも高いが、次に挙げたのは「設備や遊具が充実している」、「親子でいろいろなおもちゃで遊べる」であった。

第四に、子どもについての気がかり・心配ごとの第1位は「食事」であり、次に「発達面」であった。この割合は、昨年第6回調査より10ポイント上昇した。さらに、「からだの成長」や「トイレトレーニング」の割合も7ポイント上昇するなど、これらの項目については、昨年よりも気がかりや心配ごとの多く抱える保護者が増えていることが明らか

となった。

第五に、利用者自身については、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまおう」の回答割合がもっとも高く、次いで「子どもにイラっとすることがある」が高いことがわかった。

以上のことから、利用者への支援が一層必要であることが明らかになった。

榊原ら（2018）は、育児困難感とソーシャル・キャピタルとの関連を検討した結果、育児の自信は自己肯定感に規定されており、育児サポートや育児支援ネットワークが自己肯定感を高め、育児認識をポジティブに捉えることで、育児の自信を高めることを示唆した。さらに、周りの人に褒められることが育児の自信につながることも考えられるとした。これらのことを念頭に置き、今後も保育アドバイザー、教員、学生との開かれた関係を保ちつつ、利用保護者と子どもが安心でき、保護者の育児の自信につながるような働きかけをしながら、子育てに楽しみを感じ、育児の疲れを和らげられるような仲間づくりのできる場を提供できるよう努めていきたい。

謝辞

質問紙調査にご協力下さいましたオープンスペース利用者の皆様と、本事業に携わる保育アドバイザー、外部講師、事業を支えて下さる地域のサークルの皆様、そして、本学の教職員に厚くお礼申し上げます。

註

- 1) 虐待防止のPRに使われたポスターである。ポスターを作成した医師と看護師は、子育てのつらさで追い詰められた親が子どもを傷つけてしまうような場合、親への支援も不可欠と考えていることを語った。
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20191129/k10012195621000.html>（令和元年12月26日閲覧）

引用・参考文献

- 大豆生田啓友. (2006). 支え合い, 育ち愛の子育て支援: 保育所・幼稚園・ひろば型支援施設における子育て支援実践論. 関東学院大学出版会: 東京, 20-30.
- 汐見稔幸. (2017). 少子化社会の中での子どもの育ち: 子育て支援の必要性. 児童心理, 1051, 141-145.
- 上田よう子. (2018). 地域子育て支援拠点における利用者の心情変容プロセスを支える支援に関する研究. 保育学研究, 56, 2, 111-119.
- 榊原文, 濱野強ら. (2018). 生後3-4か月の子どもの持つ母親の育児困難感とソーシャル・キャピタルとの関連. 厚生指標, 65, 8, 15-21.